

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 8 日現在

機関番号：11501

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2014

課題番号：23530980

研究課題名(和文) フランスのフレネ教育における 自尊感情 と 他者へのかかわり

研究課題名(英文) "Self Esteem" and "Relations with Others" in Freinet Pedagogy in France

研究代表者

坂本 明美 (SAKAMOTO, Akemi)

山形大学・地域教育文化学部・准教授

研究者番号：40400535

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、フランスの「フレネ教育」について、「自尊感情」と「他者へのかかわり」という視点で考察を行なうことを目的として取り組んだ。文献・資料の調査を行なうとともに、二回フランスに調査に出かけて、学校(学級)訪問を行なった。一回目は平成24(2012)年3月に、南フランスのヴァンスの「フレネ学校」を訪問し、二回目は平成26(2014)年3月に、「フレネ技術」を導入している公立学校を中心に訪問し、幼児教育の実践も観察した。それぞれ観察と記録を行ない、インタビューも実施した。

研究成果の概要(英文)：The objective of this research is to consider "la Pedagogy Freinet" (Freinet Pedagogy) from the viewpoints of "self esteem" and "relations with others". In addition to conducting a review of the literature and other materials, this study presents the results of a survey conducted on two occasions in France in a number of schools (classes). For the first survey, in March 2012, L'Ecole Freinet, which is a school in Vence in Southern France, was visited, and for the second survey in March 2014, public schools, were visited, including classes that had introduced "les Techniques Freinet" (Freinet Techniques), and preschool education practices were observed. Along with each implementation of the survey, observations were made, notes taken, and interviews carried out.

研究分野：教育方法学

キーワード：フレネ教育 自尊感情 かかわり フランス

1. 研究開始当初の背景

(1) 我が国の子どもたちは、世界の他の国々と比較すると「自己肯定感」が低い、という現状がある。このことは、非常に憂慮すべき事態だと考える。筆者は、「自己肯定感」、「自尊感情」というテーマに関心を持っている。

(2) 一方、「自己肯定感」、「自尊感情」について関心を持つようになる前のことであるが、筆者は1989年11月上旬～12月上旬の一ヶ月余り、フランスのヴァンスにある「フレネ学校」を初めて訪問・滞在し、同校での実践を観察する機会を得た。教室に初めて足を踏み入れた時のことを今でも鮮明に覚えている。その時に感じたこととして、同校で実践されている「フレネ教育」は、人が自然に呼吸するのと同じように、人が生きていくうえで「自然な」教育であるということであった。この「自然さ」について、何がそのように感じさせるのか、当時は深く理解することができなかつた。しかし、その後、「フレネ教育」についての研究を少しずつ進めていき、同校を複数回訪問し、フランスで「フレネ教育」を導入している他の実践も観察する機会も得て、さらに学びを深めていながら、ヴァンスの「フレネ学校」で感じた「自然さ」を生み出している要素の一つとして、子どもの尊厳を大切にしている、ということがあつたのではないかと考えた。そして、子どもの尊厳を大切にしているということは、「フレネ教育」の基盤になっているのではないかと考えるようになった。

(3) 本研究では、上述した(1)の「自己肯定感」・「自尊感情」と(2)で述べた内容とを結び付け、「フレネ教育」についての研究を、筆者の研究の原点に立ち返って取り組んでみたいと考えた。つまり、1989年にヴァンスの「フレネ学校」で感じた「自然さ」につながる「子どもの尊厳」について考えてみたいと思った。

(4) 「フレネ教育」についての筆者のそれまでの研究経過を振り返ってみると、研究テーマとして、例えば、「学校共同体」、「協同」、「学校協同組合」、「異年齢(異学年)学級」などがあつた。これらのテーマの共通項として、「他者との関係」が挙げられるように思う。「他者との関係」、「他者へのかかわり」は、「フレネ教育」以外の教育分野においても、筆者が関心を持っていたテーマであつた。今回の研究テーマである「自尊感情」も、「他者との関係」が深く関わってくる。特に、本研究課題のテーマを考えた頃、筆者は、他人の成功を我が事のように喜べる、そのような「他者へのかかわり」について関心を持っていた。そこで、「自尊感情」が基盤となる「他者へのかかわり」について焦点を当てたいと考えた。

(5) 上記の(1)～(4)の内容を相互に関連づけながら、「自尊感情(あるいは「自己肯定感」)」と「他者へのかかわり」という

テーマで、「フレネ教育」について研究してみたいと考えるに至つた。

(なお、筆者は平成23年4月12日に出産し、平成23年2月12日～平成23年9月7日を産前産後休暇と育児休業期間とさせていただいた。本研究については、研究開始予定年月日を平成23年9月8日として、「育児休業等に伴う交付申請留保届」(様式D-10)を提出させていただいた。)

2. 研究の目的

本研究は、フランスの「フレネ教育」について、「自尊感情」と「他者へのかかわり」という視点で考察を行なうことを目的とする。

子どもたち一人ひとりが、「自分は大切にされている、必要とされている」と実感しながら学び、学校で生活するために、「フレネ教育」では何が支え、具体的にどのように実践されているのか。これらのことを明らかにすることによって、子どもたちが学級や学校で「自尊感情」を育み、他者を受容し、他者へかかわりながら学び、生活できるような、授業づくり、学級づくり、関係性の構築のための手がかりを得ることができないか、と考えた。

3. 研究の方法

主に、(1)文献調査と(2)フランスにおける調査の、二つの柱で進める。

(1)文献調査については、研究テーマに関連する日本語とフランス語の文献・資料の収集を継続的に行いながら、読み進めていく。フレネ教育に関する資料はもちろんのこと、研究の土台となる「自尊感情」、「自己肯定感」、あるいはそれらと類似した内容に関連する文献を読み、基盤となる概念についての理論を深めていくことも必要となる。

(2)フランスにおける調査を合計2回実施する。一回目は平成23年度、二回目は平成25年度に行なう。「フレネ教育」(「フレネ技術」)を実践に導入している学校(学級)を訪問し、観察・記録を行う。筆者が1989年以来、複数回訪問させていただいているヴァンスの「フレネ学校」については、平成23年度に調査を実施する。フランスにおける調査では、可能な限り、関係者にインタビューもさせていただく。

4. 研究成果

本研究の主な研究成果としては、次のようなことが挙げられる。研究期間全体を通して合計2回、フランスに調査に出かけ、「フレネ技術」(「フレネ教育」)を導入している学校あるいは学級を中心に訪問し、観察・記録させていただいた。その際に、可能な限りインタビューもさせていただいた。そして、調査内容について、学会発表を行なった。調査内容の中には未発表のものもあるが、観察・記録・資料収集はできたので、今後、その未

発表の内容も含めて、論文等にまとめ、発表したいと考えている。

(1) 第一回目のフランスにおける調査は、平成 23 年度の平成 24 (2012) 年 3 月に実施した。訪問したのは、ヴァンス (Vence) の「フレネ学校 (L' Ecole FREINET)」である。南フランス、アルプ・マリタイム (Alpes Maritimes) 県ヴァンス郊外にあり、セレストン・フレネ (Célestin FREINET: 1896 ~ 1966) が築いた学校である。同校は現在、公立学校として存続している。この平成 24 (2012) 年 3 月の調査で観察・記録した内容を中心に考察し、2007 年 3 月に筆者が同校を訪問し観察・記録を行なった内容との比較も部分的に扱いながら、学会発表を行なった。学会発表は平成 26 (2014) 年 3 月 8 日、東北教育学会第 71 回大会 (於 東北大学) で、「自由研究発表」で発表した。発表タイトルは、次の通りである。

「フランス・ヴァンスの「フレネ学校」における教育実践についての一考察 ~ 教育 (実践) の継承に着目して ~」

発表内容の概要を簡単にまとめると、次の通りである。

ヴァンスの「フレネ学校」には、フランス国内だけではなく、世界各地から訪問者があり、実践的な研修や研究が行なわれている。筆者 (坂本) は、1989 年の第一回目の同校の訪問以来、複数回訪問させていただいている。筆者の平成 24 (2012) 年 3 月訪問時よりもさかのぼる 2009 年の学年度末に、それまで長年「フレネ学校」で働いてきたベテラン教師 2 名 (カルメンとブリジット) が退職された。彼女たちの退職後、2 名の教師が同校に任命され働き始めるが、そのうちの一人が産休に入ったため、筆者の平成 24 (2012) 年 3 月の訪問時は、その産休に入った教師の代わりに、代替教員が同校で働いていた。このような状況であった「フレネ学校」で、筆者は実質 6 日間観察させていただいた。その時に観察した内容をもとに、次のような視点で考察した。

ヴァンスの「フレネ学校」では、同校の使命について、どのように捉えられているのか。

担任教師の異動 (世代交代) があるなかで、ヴァンスの「フレネ学校」における教育実践は、どのように継承されようとしているのか。

(筆者が 2012 年 3 月に同校を訪問した際に、特に注目した教育実践の特徴として、「異年齢学級」(異学年混合学級) についてと、幼児クラスにおける読み書きの学習について、担任教師の異動を経て、どのように取り組まれているのか。

これら三つの視点に焦点を当てた考察において、筆者の (平成 24 (2012) 年 3 月訪問の前の回となる) 2007 年 3 月訪問時の同校の様子との比較も、一部扱った。実践については写真等を示しながら、具体的に説明した。

本発表を通して、「フレネ学校」の「使命」の一つとして、セレストン・フレネと彼の妻、エリーズによって遂行された仕事を引き継ぐこと、教育 (教育学) の継承が挙げられることを明らかにした。

(2) 第二回目のフランスにおける調査は、平成 26 年度の平成 27 年 3 月に実施した。3 校訪問し、そのうちの 2 校における調査内容について学会発表を行なった。学会発表は平成 26 (2014) 年 10 月 12 日、日本教育方法学会 第 50 回記念大会 (於 広島大学) で、「自由研究」で発表した。発表タイトルは次の通りである。

「フランス・パリ郊外ナンテールの教育困難校における幼児教育の実践」

この発表では、移民を背景にもつ人々が多く暮らしているパリ郊外、オー・ドゥ・セーヌ (Hauts-de-Seine) 県の県庁所在地であるナンテール (Nanterre) にある 2 校を取り上げ、幼児教育の実践について考察を行なった。2 校とも公立である。

「エルザ・トゥリオレ学校」

「エルザ・トゥリオレ学校」は、幼児学級が 6 学級、小学校の学級が 7 学級、その他に CLIS (Classe pour l' Inclusion Scolaire) と呼ばれている学級があり、合計 14 学級ある初等学校である。フランスの「フレネ教育」の組織で、「ICEM (現代学校協同研究所)」という組織があるが、筆者が訪問した時に、同校で ICEM の会員である教師は一人だけだった。筆者は、その ICEM の会員である教師が担任をされている幼児学級の一学級だけを、一日観察させていただいた。この学級は、年中児と年長児が混合された学級であり、子どもの数は、年中 7 名、年長 17 名、合計 24 名であった。この学級の子どもたちには、アルジェリア、モロッコ、フィリピン、ロシア、コンゴ、マルチニーク島 (海外県)、インド、セネガルの出身の父母、あるいは祖父母がいる。

「ジャン・ドゥ・ラ・フォンテーヌ保育学校」

「ジャン・ドゥ・ラ・フォンテーヌ保育学校」の校長によると、筆者が同校を訪問させていただいた 2013/2014 年度の同校の子どもの数は、全校で 158 名であり、子どもたちの多くは、アルジェリアとモロッコ出身の (家庭の) フランス人であるという。同校の学級数は次のような 8 学級である。

- ・最年少学級 [2 歳半 ~ 3 歳半] 1 学級
- ・年少学級 [3 ~ 4 歳] 3 学級 (このうちの 1 学級が、年少児 14 名と最年少児 4 名との合計 18 名の混合学級)
- ・年中児 [4 ~ 5 歳] と年長児 [5 ~ 6 歳] との混合学級 4 学級

校長先生へのインタビューによると、同校では、校長先生以外に 2 名の教師が ICEM の研究会に参加しているという。筆者の当日の観察については、同校が用意してくださった

スケジュール表に従って、複数の学級を一日通覧させていただいた。

(3) その他

フランスの公立学校で「フレネ教育」(「フレネ技術」)を実践に導入している教師で、フィリップ・ラミ(Philippe LAMY)氏という教師がおられる。科研費の本研究課題で研究を開始する前、筆者は彼の教室を、年度を変えて複数回訪問させていただいたことがあった。そのフィリップ・ラミ氏が、平成24(2012)年7月に、夏期休暇のためにプライベートでご家族とともに来日された。日本滞在中は他県も訪問されたが、山形も訪問されたため、再会させていただいた。そして、筆者が勤務している山形大学の担当授業においていただき、「フレネ教育」についてのお話と、フィリップ・ラミ氏ご自身が「フレネ教育」(「フレネ技術」)を導入して実践されている内容について、学生たちにお話をさせていただいた。その翌日は、筆者の本研究課題のテーマについて、個人的にインタビューさせていただくことができた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計0件)

〔学会発表〕(計2件)

坂本明美「フランス・パリ郊外ナンテールの教育困難校における幼児教育の実践」日本教育方法学会 第50回記念大会、2014年10月12日、広島大学(広島県・東広島市)

坂本明美「フランス・ヴァンスの「フレネ学校」における教育実践についての一考察 ~教育(実践)の継承に着目して~」東北教育学会 第71回大会、2014年3月8日、東北大学(宮城県・仙台市)

〔図書〕(計0件)

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

取得状況(計0件)

〔その他〕

ホームページ等

なし

6. 研究組織

(1)研究代表者

坂本 明美(SAKAMOTO Akemi)

山形大学・地域教育文化学部・准教授

研究者番号: 40400535